母親への親密性が青年期後期の娘の自己決定に与える影響について

人間科学研究科　博士前期課程１年　生島　京香

Ⅰ．問題

１．自己決定について

青年期は親からの依存を脱却し、自我を確立する時期であり（青木・森田, 2014）、親から自立する時期である。青年期のライフイベントには進学、就職があり、青年期は、進学や就職等の人生に関する自己決定を行う機会が増えると考えられる。自己決定とは、自分のことは自分で決めるという意識やその行動のことであり（岡本, 2018）、自己決定感とは、自己決定している感覚のことである（桜井, 1993）。

Deci（1980 石田訳 1985）は、自己決定について、「自己決定は、行動上の選択肢から選択を行って、唯一の選択肢しか利用しえない事態に調節するという人間の柔軟性と能力に言及する心理学的構成概念に他ならない」、「さまざまな行動選択肢が存在している場合にそれを考慮しないで、あるいはまた唯一の行動上の選択肢しかない場合にそれに対する調節や柔軟な応答をせずに自動的に行動するならば、人は非－自己決定的である」と述べている。このことより、自己決定を行う際は、一つの選択肢を鵜呑みにするのではなく、様々な選択肢を考えたり、どの選択肢を選ぶか考え、納得した上で一つの選択肢を決定することが重要である。

また、江原（2002）は、本人が「自己決定」したと言うためには、情報が十分に提供されていることや、強制や脅迫・誘導がない状況で判断することが必要であると述べている。さらに、江原（2002）は、自己決定を実現させるためには、ある人がどんな意思を持っていたとしても、「自己決定」できるように周囲の人々が誠実に対応し、その意思を実現できるよう援助することが規範として確立されている必要があると述べており、自己決定は、一人で行うことはできず、他者との関わりが必要不可欠であると主張している。

２．青年期の自己決定

青年期においては、新たな親子関係を構築するためにも、親子が互いの要求を調整し合うような新たなコミュニケーションが必要となる（柴田, 2000）。また、青年期の課題にはアイデンティティの確立が挙げられ、杉村（2001）は、アイデンティティの形成の過程を、他者の意見・期待も考慮し、自己と他者の視点の食い違いを解決しながら人生の重要な選択を決定していくことであると定義している。このことより、青年が自己決定を行う際には、他者の意見を受容し、自分の意見を主張し、お互いの意見を調整し合いながら決定していく必要があると考えられる。

さらに、女性の精神的自立について検討した研究において、女性は母親との依存・絆が比較的強いまま維持される（渡邊, 1997）ことが示されており、女性は、母親との距離の近さを保ちながら自立する（水本・山根, 2010）。このことより、特に青年期の娘において、一人で自己決定を行わず、自己決定に、母親が関係している娘が多いのではないかと考えられる。

３．母娘関係と自己決定

近年、我が国では一卵性母娘と呼ばれる親密な母娘関係が増加している（江上・中田, 2018）。信田（1997）は、「一卵性母娘の娘は、母親の価値観を自分の価値観とすることに居心地の良さを感じるため、自立せず、未分化のままである」と述べている。また、斎藤（2008）は、「娘がアイデンティティを形成する上で、同性である母娘との同一化は欠かせない過程である。しかし、それ以上に重要なのが差異化の過程、すなわち自分が母親とは違う存在であることに気づき、それを受け入れ、実現していく過程である」と述べており、青年期の娘は、母親

に対する同一化から抜け出すことが困難であり、母親と娘の境界が曖昧になりやすいと考えられる。このことより、母親と自分は異なる存在であることに気付き、自身の意見や価値基準、自己決定に関する意識を持つことで、自立につながるのではないかと考えられる。

寺嶋・吉岡（2017）は、娘が親の期待、願い、雰囲気を敏感に感じ取り、本当の自分の姿を抑制しているような「いい子」を振る舞うかどうかは、心理的サポートのような母親の情緒的関わりによって、安心感を得ることができるかが関係していることを明らかにしている。このことより、娘の自己決定には、本来感や安心感を得ることができるような母親の情緒的関わりが関係していると考えられる。

４．母親への親密性

水本（2016）は、「母親への接近欲求に基づく親愛的情緒」を母親への親密性とし、自己統制感の高さと愛情の方向に着目して、娘が母親に抱く親密性にはどのようなものがあるかを検討した。その結果、母親への親密性として、娘から母親に愛情を与える方向の親密性であり、母親を思いやり、気づかおうとする「母親への心づかい」、母親への依存的な親密性であり、母親が無条件に自分の情緒的欲求を受け入れてくれるという安心感を示す「母親への絶対的安心感」、母親への依存的な親密性であり、母親の価値観に捉われている「母親の価値観への捉われ」を見出した。さらに、水本（2016）は、これらの３つの親密性は、母親からの精神的自立に異なる影響を与えていることを明らかにした。このことより、母親への親密性の在り方により、娘の自己決定の様相も異なるのではないかと考えられる。

青年の自己決定や進路選択時の親子間コミュニケーションが青年の発達や適応に与える影響については検討されているが、自己決定や親子間コミュニケーションに影響を与える要素について検討されている研究は少ない。

Ⅱ．目的

本研究では、自己決定意識と青年期後期の娘の精神的自立との関連について検討すること、母親への親密性が青年期後期の娘の自己決定に与える影響について検討することを目的とする。

Ⅲ．今後の展望

自己決定の場面により、自己決定に影響を与える要因は異なってくると考えられる。大学進学時の進路選択や日常生活における決定、就職や結婚等の将来に関する決定など、様々な自己決定の場面が考えられるが、一つの場面に絞り検討していきたい。また、自己決定には母娘関係の他にも様々な要因が関係していると考えられる。したがって、自己決定に与える他の要因にも着目し、検討していきたい。

調査は、母親と死別または離別していない女子大学生、大学院生を対象とし、質問紙調査を実施しようと考えている。

Ⅳ．引用文献

青木多寿子・森田愛望（2014）進路選択時の自己決定と女子大生の大学適応感、親子関係について　教育心理学研究, 56, 536.

Deci, E. L.（1980）The psychology of self-determination. New York: Lexington Books.（デシ, E. L.　石田梅男（訳）（1985）自己決定の心理学―内発的動機づけの鍵概念をめぐって　誠信書房）

江上園子・中田沙也加（2018）母と娘との密着関係における規定因と帰結の検討　愛媛大学教育学部紀要, 65, 117-125.

江原由美子（2002）自己決定権とジェンダー　岩波書店.

水本深喜・山根律子（2010）青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の

意味：精神的自立・精神的適応との関連性から　発達心理学研究, 21, 254-265.
水本深喜（2016）母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響―「母親への親密性尺度」による検討―　青年心理学研究, 27, 103-118.
信田さよ子（1997）一卵性母娘な関係　主婦の友社.
岡本遥（2018）青年期における心理学的自己決定モデル構築の試みに関する研究　花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要, 12, 45-55.
斎藤環（2008）母は娘の人生を支配する　なぜ「母殺し」は難しいのか　日本放送出版協会.
桜井茂男（1993）自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み　奈良教育大学教育研究所紀要, 29, 203-208.
柴田利夫（2000）青年期の対人関係　藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿（編）青年期以降の発達心理学―自分らしく生き、老いるために―　北大路書房　pp.56-74.
杉村和美（2001）関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2年間の変化とその要因　発達心理学研究, 12, 87-98.
寺嶋愛・吉岡和子（2017）母娘関係と「いい子」との関連―母親の情緒的関わり、母娘の絆と娘の安心感及び本来感に着目して―　福岡県立大学心理臨床研究, 9, 35-48.
渡邊恵子（1997）青年期から成人期にわたる父母との心理的関係　母子研究, 18, 23-31.